



「リウマチと生きる」 島田広子著

著者は9歳からリウマチと共に歩き出し寛解、再燃を繰り返す中で、リウマチ友の会の前身を20年前に結成し会の育成とリウマチ啓蒙に取り組んでこられた。現在リウマチ友の会の理事長であり、本誌や「総合リハ」誌にも投稿されているので、著者のことを御存知の読者も多いことと思う。

この書はリウマチ友の会が20周年を迎えたのを機会に著者が今まで発表した文章を中心にまとめあげたものである。その内容は伊藤久次先生、一番ヶ瀬康子先生も書き記されているように、正に著者の「生きざま」が描きだされている。リウマチ患者さんの気持ちや願いを理解するための良書という以上に、一人の人間としての生き方に衝撃を覚える。

本書は三部門に分かれており、Ⅰリウマチとは、Ⅱリウマチとつきあうために、Ⅲリウマチと生きる、で構成されている。Ⅰでは、リウマチを早期に発見し治療するためのヒントから医療福祉―身障者手帖および障害年金の手続の仕方、国家的対策への要望―まで記されておりリウマチの啓蒙と対策に向けての努力の程が窺われる。

Ⅱの「闘病の心がまえとして」ではリウマチ110番で著者がきつと何度も見ず知らずの同病者に対して「上手につきあうコツ」や「基礎療法」について親切に指導してこられたであろうその姿が目浮かぶような内容である。また、著者自ら「良い」と言われている民間療法を体験しそれに対するコメントを与えている。「リウマチの四季」と題した中では実践的生活、友人とのふれ合い、「流ちゃん」「流魔」とのつき合いを四季折り折りにふれ情緒豊かに表現している。Ⅲでは、9歳の頃からの生活史と友の会のあゆみが著者との関わりを通して描かれている。

実際にリウマチと共に生きていく人のことばは心を強く打つ。リウマチに対する誤解に胸を痛め、「流魔」の暴れまわる時には「何故私が……」と恨む。しかしその下に生きる力が脈打っているのを感じさせる書である。

セラピストに、患者さんに、是非一読をおすすめしたい。

(四六判, 220頁, ドメス出版, ¥1,300, 1980)

(東京大学医学部付属病院 作業療法士 木村 信子)